

# 原作バラバラの短編集

水風刹那

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネタとしては浮かんだもの

連載まで持つていくかは微妙な設定のたまり場

もしかしたらここから連載に分岐させるかも

Fate／grand order&美遊兄（転生憑依者）

# 目次

F a t e

英霊：美遊兄（転生憑依者） i n カルデア

1

マテリアル「朔月士郎」

10

F a t e

英霊：美遊兄（転生憑依者） i nカルデア

冬木の地

そこでとある少女達が戦っていた

己が親友を助けるため人を道具正義の味方と扱う者と対峙していた。

しかし、溢れ出る泥は止まることを知らず流れ出る

男は告げる

「神話を一説進める。逃げるのなら好きにしろよ美優。だが、エインズワースの暗闇は地の果てまで覆い尽くすぞ。」

溢れ出た泥は形を成す

目標である少女願望器を求めて歩む

その様に魔法少女：イリヤスフィールとクロエ、遠坂凜とルヴィア・エーデルフェルト、バゼットは驚愕の声を上げる

「な!?泥が人形に!?!」

「まさか・・・」

「これ一つ一つが・・・英霊なの!?!」

「じよ、冗談でしょ?」

鎧を纏い、剣を取った泥を止めようとするも太刀打ちすらも難しい聖杯を求めた泥の英霊は意思なき獣となって這う

その数は無尽蔵に増え星を埋めつくさんとする

男は告げる

「この災害を止めんとするなら分かるな?・・・自分の意思で俺の手を取れ。」

目下では少女の友がその仲間が依然として英霊と戦っている

決断を迫られる少女

自分と友を秤にかける事などこの少女には出来なかった

少女と共に戦った礼装が告げる

「いけません美遊様!ここで戻ってしまったては全てが水泡に帰してしまいます!」

男の顔が愉悦で歪む

心優しき少女の弱みに漬け込む正義の味方エインズワース

男の手を少女が取らんとした時

そつと・・・横からその手を掴む者がいた

「そんな手・・・握っちゃダメ・・・」

「っ！イリヤ・・・？」

「イリヤスフィール・・・っ！」

先程まで笑っていた男の顔が怒りに染まる

「・・・くだらねえ・・・結局継るものをすべて失わねえと分からねえのか！」

英霊達がイリヤに、遠坂に狙いを定め矢を放ったその時

「熾ロイ・ア天覆アう七つの円環ア」

その前に突如として7枚の花弁を持つ盾が展開される

次々と飛来する矢や槍を弾き、その後ろにいた3人を守る

盾が消えると同時に

何者かが近づいてくることがわかる

「・・・そうだ、美遊。もうお前はそんな男に縛られなくていい。」

「う、うそ・・・なんで？」

「どういう・・・ことですか？」

その人物を視界に入れた凜とルヴィアは今日何度目かの声を上げる

「状況は・・・まあ、見ただけでハッキリとわかる・・・ありがとう、妹の・・・美遊のために戦ってくれて。俺が離れていたばかりに君達にも迷惑をかけてしまった。だから休んでくれ・・・あとは、俺が始末をつける。」

駆け付けたものの名は衛宮士郎、衛宮美遊の兄にして

図らずして衛主宮人士郎公になった転生憑依者だった

「衛宮ああ!!」

「お前の野望も夢も今日ここで叩き潰す・・・ト投影レ・・・ス・・・オ開始」

——視点移動「衛宮士郎」

気がついたら死んでいた。

目を覚ませば真っ白の空間で目の前にはそこに不釣り合いのブラウンテレビ。

映し出されたのは自分を「神」と名乗った胡散臭い男と

これから自分が成り代わる人物についての説明書

有無も言わさず強制転生させられて、目覚めた先は地獄だった

焼け払われた大地を見て、自分を引き取った人物を見て

すぐに成り代わった人の事が分かった

(衛宮士郎じゃねえか・・・)

正義の味方を目指した破綻者、自分からこぼれ落ちたものなどなくただひたすらに誰かの為にしか動けなかった主人公

そんな者になってたんだ、すぐに自殺しなかったただ褒めて欲しかったもんだよ。

初めのうちはクソみたいな環境が嫌で引き取り手の爺さん・・・衛宮切嗣ともほとんど会話もなく、ただ無意味に過ごしていた

そんな中彼女に出会った

その子はFateシリーズにおいても比較的序盤は平和な世界である

プリズマ☆イリヤシリーズに登場する「朔月美遊」だった

倒壊寸前の家に1人居た少女、その子と触れて関わって共に暮らすうちに俺が来て全てが灰色に見えていた世界に色が生まれた。

美遊から初めて「お兄ちゃん」と呼ばれた時、生まれ変わって初めて笑うことが出来た。誰かの為に作る時間も料理も家族の温かさも全て美遊が与えてくれた。

それに気がついた時俺にはあるひとつの思いが生まれた

——例え、この世すべてを敵に回したとしてもたった一人の家族の

ためならば、俺は喜んで悪となろう――

守る為に殺す力を求めた

幸いにしてこの身は守護者と成りえた身体

素質は十分であり己には転生時に付けられた力があつた

ならばそれらを極めよう

書き換えられた己の起源は《剣》と《夜》

この身は元より剣製に特化した身体。

知識として鍛錬方法は分かっている、ならばさらに過酷に熾烈に鍛えればより強くなる

何れこの些細な幸せは崩れ去る

その時、少しでも美遊に安心してもらえるよう。

心配をかけないよう、そして何よりいずれまた笑って暮らせるように

決して負けられない戦いまで

そうして鍛え上げてたどり着いた先は守護者の遥か先だつた。  
理想は捨てて、家族の為にへ

いつかのために美遊を狙つた魔術師は狩り尽くした。

聖杯戦争の参加者も例外なく関係者諸共切り殺した

美遊を逃がす為にエインズワースの英雄王との戦いでも時間稼ぎに徹して俺自身も逃げきれた。

きつと自分でも知らないうちにこの世界そのものを俺は恨んでいたんだらう。

まだ、幼い少女を犠牲にしようとした世界を。

そこに暮らす人々と逃がすことしか出来ず、根本からの解決が出来なかつた自分を。

救済寸前だつた世界を裏切つた俺は命を狙われ続けたその度に無関係な者も巻き込み殺した。

脇目も振らず走り続けた。

気がつけば俺は「魔王」と呼ばれる存在になっていた

——視点移動「現在・三人称」

「衛宮あああ!!」

「ジュリアン!! エミヤの名前はもう捨てた。ここに居るのはただの士郎だ。美遊の為に前もここで潰えてもらおうぞ」

駆けつけた衛宮士郎はその手に持った石斧をもって劣化英霊サーヴァントを斬り捨てた。

「くっ……だが、今更来たところでどうする! この数相手に1人で立ち向かうつもりか!」

「確かに、目視できる限りでも俺が不利なのは変わらない……だが、忘れてないか? お前の前にいるのは真正銘この世界最強の人間だ! お前が善の為に1を殺すというのなら俺は何度だって悪をなそう。覚悟はいいか! 正義の味方!」

一瞬の内に空を覆い尽くすほどの無数の剣を投影し

それらを雨の如く降り注がせる事で泥人形は手も足も出ないまま碎かれる

眼前から黄金の鎧を身に纏うものが現れる。

「貴様だけは通さん。」

「奇しくも逆だな、あの時と!」

「ほごくな……フェイカ贋作者」

「お互い様だろ! お前は言ったな『無数の剣を持った所で究極の1には叶わない』と……ならば見せてやろう。これが俺のたどり着いた答えだ」

士郎から溢れ出る魔力は到底、人の範疇に収まるようなものではなかった。

彼の起源である《夜》それは、かの円卓の騎士と逆のもの。

日の沈んでいる間のみ自身の全ての能力を3倍にするものなのだ

英雄王から撃ち出される宝具の雨、その全てを複製し相殺しながら士郎は紡ぐ、自身の心を、己の誇る最強を!

トレスオン「投影開始……固有結界制御……成功、詠唱開始」

憑依経験・共感終了・工程完了「身体は剣で出来ていた……」



固有結界の詠唱と共に別の作業を並行して行うという自殺行為も甚だしい技を駆使して剣を作る

「理想は捨てて<sup>全</sup>影<sup>待</sup>希望は消えた<sup>機</sup>……」

「幾度の死線を超えて無敗」

「ただ一度の復讐をこの身に……黒い炎にて剣を打つ……担い手は一人……最後の願いを家族に告げる……」

「小癩な！その魔術、エインズワースに対するの侮辱に他ならん！」

宝具の射出速度が上がり士郎1人での対処が難しくなる

いや、この英霊に対して人の身のままでここまで対処した事が異常なのだ。

そして切り払えなかった宝具の1本が士郎の眼前に迫り

「ならば、全てを捨てようこの身体は悪を成す!?(マズい！払い損ねた!)」

「そのまま進んで！お兄ちゃん！」

頭部に刺さる寸前もう1人の贗作者が駆けつける

無言のままに詠唱を再開、更に二人がかりで宝具の雨を切り開く

「贗作者が2人……おぞましい限りだ！」

「あら？仮面が外れてるわよ？英雄王さま？」

「小娘が！調子に乗るな！所詮馬鹿の一つ覚えだ！」

「自己犠牲の果てにきつと……この<sup>だが、その馬鹿にお前は負けるんだよ！</sup>身体は！」

2人の贗作者が放つ英霊エミヤの絶技。一刀、一刀が必殺であり回避も防御も不可能の技、その二重！

だから……

「無駄だ」

「<sup>最も信頼する守り方に頼る！</sup>空間置換による無敵の回避……」

「死ぬ（……もう1人は……）」

剣を士郎に振り下ろそうとした時足元から予想外の一撃が彼女を襲う

「ぐっ！(空間置換の意識外……!?そうか！こいつは転移の使い手!)」

士郎にばかり目が向いていた彼女には

クロエの行動が見えておらず彼らの罠にまんまとハマってしまっ

たのだ。

「無限Lim束itねたZer剣oと成り果ovてたr！！」

それと同時に士郎の詠唱も完成した

彼の手には無限を内包した一本の剣ツルギ

そのあり方はまるで人々の幻想を束ねた星の聖剣のようであった

「お前の宝具も見飽きたよ。道を譲れ！英雄王！」

「贗作……者」

英雄王を撃破した士郎は手にした剣を振りかぶり

己を体現した剣の名を高らかに吠える

「これで……終わりだ！ジュリアン！お前から！世界から俺の妹を返してもらうぞ！」

「ふざけるな！なぜこの世界の救済から目を背ける！この悪魔が！」

「無限ユの幻想クを！」

「貴様に幸せなど訪れるものか！呪われる！衛宮士

郎おとおおおおおお！！」

「体現ガせし星屑パーの剣！！」

剣から放たれた極光は地を裂き、空を穿ちジュリアンを飲み込み  
泥を消し飛ばす。

その姿を後ろから見ていた美遊、イリヤ、クロエ、凜、ルヴィア、バ  
ゼットは佇みこちらを見る士郎に。

そして、士郎は自分を見る彼女達に、お互いに微笑みを浮かべ

「おかえり美遊」

「ただいま！お兄ちゃん！」

兄弟は再会を果たす

しかし・・・

「え？」

士郎の戦いは終わらない

再開と同時に青年の姿は消え

「衛宮士郎・・・いや、朔月士郎と呼ぼうか。君に依頼がある」

「人理修復に向かってもらう。ああ拒否権は無い」

Fate/Grandorder  
平行 世界へ

「・・・アラヤのクソツタレが・・・」

ここはとある場所にある建物

ここでは今まさに世界を救う戦いが行われていた

組織の名は「人理継続保障機関フィニス・カルデア」

その組織のとある部屋に人類最後のマスターが居た

「先輩？どうしたんですか？」

紫髪の眼鏡の少女がオレンジ色の髪の少女に問いかける

「もちろん！英霊召喚だよマシユー！」

「なるほど、だからみなさんも一緒なんですね？」

先輩と呼ばれた少女のそばには赤い外装を纏った男

青い鎧を纏った美少女、その少女によく似たメイド服の女性と数えるのも嫌になるほどの英霊を連れていた

「六花ちゃん、準備OKだよ！」

「ありがとうロマン！よし、英霊のみんなどうか私に力を貸して！」

《守護英霊召喚システムフェイト・・・起動します》

英霊を特別な形で召喚するこのシステムでは

英霊又はマスターとの絆によって召喚されるサーヴァントが決められている・・・が。今回アラヤからの介入によってある特別なサーヴァントが召喚される

「こ、これは!!登録されていない霊器だ！クラスはエクストラクラス！サーヴァント召喚されるよ！」

登録されていない霊器さらにエクストラクラスとあって

既に召喚されていたサーヴァント達には動揺が走る

そして召喚機から虹色の光が溢れサーヴァントが姿を現す

召喚されたサーヴァントは男性で

黒のボディーアーマー右肩は露出、そこに赤い外装を纏い、額にも同じカラーのバンダナをしている。

露出した部分から見える肌は褐色部と肌色で別れており、頭髮は八割が白髪残りがオレンジ色だ

サーヴァントが見えるとその場にいた英霊達にさらなる動揺が走る

「まさか・・・し、士郎・・・」

青いブリテン王はありえない姿の元マスターに驚き

「・・・この感じ・・・お母さん？」

殺人鬼の少女は青年の纏う死の臭気を感じ取り懐かしむ

「・・・ほう」

青い槍兵は過去に共闘し成長した青年を見定めるような視線を送り

「・・・貴様・・・っ！」

赤い弓兵は自分ではたどり着かなかった・・・たどり着くことのない  
かった答えを出した少年に怒りを抱いた

そして、彼らのマスターは

「ようこそ！人理継続保障機関フィニス・カルデアへ！歓迎するよ！  
これから宜しくね！で、貴方は何処の英霊なのかな？」

「随分グイグイ来るマスターだな・・・まあ、いい。サーヴァント  
アヴェンジャー復讐者朔月士郎。アラヤに駆り出されて参上した。この一時、役目を  
を終えるまでまあ、宜しくな」

これは

期せずして主人公に転生憑依してしまった男が

己の家族を救うため世界と敵対し

その後、世界を救う戦いに望む物語

## マテリアル 「朔月士郎」

クラス 《復讐者》

真名 《朔月士郎》

外見 《黒いボディーアーマーに右肩露出、赤い外套を身に纏い同じく赤いバンドナを巻いている。肌は露出した腕は褐色化が進み髪はほぼ白髪化》

属性 《混沌・悪》 《反英霊》

身長 《184cm》 体重 《74kg》

筋力 《B++》 耐久 《B++》 俊敏 《B++》

魔力 《A++》 幸運 《C》 宝具 《??》

クラス別保有スキル

対魔力 《B》 単独行動 《B》

保有スキル

鷹の目 《A》

投影魔術 《A+》

極夜の魔王 《EX》

↓午後18時から午前6時までステータスを3倍にする

↓3ターンの攻撃力アップ（倍率300）夜間及び暗闇下における

Busterアップ（倍率300）

宝具

アンリミテッドブレイドワークス  
【真・無限の剣製】

【無限の幻想を体現せし星屑の剣】

【孤月刀 《鬼切》】

キャラクター詳細

英霊エミヤとはまた別の可能性の先にある姿

たった1人の為に自分の信念も理想も願いも切り捨て、世界を敵に回した世界で最も命を奪った悪。

絆レベル2で解放

自身と家族の運命を変えてしまった聖杯戦争に憎しみを抱え、英霊を憎み何を犠牲にしても家族を救う事を誓った復讐者

そのため他の英霊・・・特にある時期に召喚されていた7基とは特に仲が悪い。

絆レベル3で解放

○極夜の魔王

この朔月士郎の魔術特性である【夜】の特性が昇華されたもので夜間の身体強化を極端に上昇させるもので

彼自身が英霊となるまでに世界から付けられた異名で省略されずに言えば

【極東より来る永遠の夜を告げし魔王】

となり、これは彼が悪として世界の人々から狙われ始めた際に一切の情を無くし殺し尽くしたことから付けられ、スキルとなった。

固有結界発動時には現実時間関係なくこのスキルは起動する。

絆レベル4で解放

【真・無限の剣製】

ランク：E↘A++ 種別：対人宝具

アンリミテッドブレイド・ワークス

かの英霊と同種の物だが

その実は完全上位互換の代物で

神造兵装すらも時間をかければ投影可能

ランクダウン無し、負担軽減、消費魔力減少、投影制限解除

宝具に宝具を上書きしてランクを無理やり上昇させる

「トレリス・フラクタル投影・多重装」最大3層まで

・例、ランクB↓ランクA+

なお彼の固有結界は吹雪の夜と紅い月

また、最後の詠唱を切り替える事で無限を内包した1本の剣にすることもできその見た目は星の聖剣のようである

【無限エクスの幻想ククスを体現カカせし星屑リパーの剣】

ランク：EX 種別：対敵宝具

上記に記された固有結界を1つの剣に凝縮したもの。

彼が記憶したあらゆる刀剣類の特性を瞬時に最適なタイミングで引き出すことを可能としている。

ただし、固有結界を凝縮するという特性上

固有結界展開中はこの剣を取り出す事は出来ず、逆にこの剣の展開中は固有結界使用不可となっている

【孤月刀「鬼切」こげつとうおにきり】

ランク：A 種別：対軍宝具

世界をめぐり魔術師を殺し回っていた当時魔術師の拠点や教会から奪った資材

また、国宝【童子切安綱】を用いて打った日本刀で形状は打刀（86.64cm Ⅱ2尺2寸8分）握りと鞘は紅く刀身は黒に染まっている

真名解放で人外特攻の黒い斬撃を飛ばす

絆レベル5で解放

元々は極一般的な家庭で平和に暮らしていたが転生憑依という形で記憶を無くし衛宮士郎となる

その後、妹を救う為に聖杯戦争に参加

アサシン、ランサー、ライダー、キャスター、バーサーカー、セイバーを下し

最後に残ったアーチャーを足止めし彼は妹を平行世界に逃がした

その後世界中の魔術師から命を狙われるも次々と下した。

当時の聖杯戦争の参加者であった魔術師が彼の妹を再び平行世界から連れ戻したことにより決着をつける為に舞い戻る

アーチャー・・・英雄王のカードを使う者を倒し妹を助け、協力してくれていた

平行世界の妹の友達2名と遠坂凜、ルヴィア・エーデルフェルト、子ギルと共に妹・・・美遊を救出

再開の喜びを分かち合う直前アラヤによって平行世界に強制召喚

その際のクラスはその世界を壊し尽くし他ということでは彼は最新の反英霊《復讐者》として座に登録。

彼を呼び出すには同じ起源のエミヤか魔法少女、遠坂凜を依代とした英霊。

また、源頼光（刀繋がり）がいる事が条件となっている。

ボイス

バトル

開始1

「戦闘開始だマスター」

開始2

魔力補給  
「給料分は働くさ」

スキル1

トレース・オン  
「投影開始」

スキル2

「本気で行こう」

コマンドカード

1 「了解」

2 「分かった」

3 「いいだろう」

宝具カード

固有結界の場合

「俺の剣製の果てを見せてやろう」

Limit／ZeroOverの場合

「固有結界制御完了・・・魔力を寄越せ！勝負をつけるぞ！」

孤月刀の場合

「封鎖解除・・・」

アタック

1 「はあっ！」

2 「脆い！」

3 「邪魔だ！」

エクストラアタック

「すべて見切った！」

宝具

固有結界の場合

「身体は剣つるぎで出来ていた」



「理想は捨てて・・・希望は消えた」

「幾度の死線を超えて無敗」

「ただ一度の復讐をこの身に・・・黒い炎にて剣を打つ」

「担い手は一人・・・最後の願いを家族に告げる」

「ならば、全てを捨てよう」とこの身体は悪を成す」

「自己犠牲の果てにきつと・・・この身体は」

これより分岐

固有結界の場合↓「無限の剣で出来ていた」

Limit/ZeroOverの場合↓「無限を束ねた剣と成り果てた」

孤月刀の場合

「血と肉、復讐を形となし」

「この刃は光を裂く闇となる」

「地を果て喰らえ・・・孤月刀朧「鬼切月」！」

ダメージ

1 「っ！ヤロー・・・！」

2 「ちっ」

戦闘不能

1 「ごめん・・・マスター・・・」

2 「俺の負け・・・か・・・」

勝利

1 「ま、順当な結果だな」

2 「慢心はするなよ？足元から崩されるぞ」

レベルアップ

「まだまだ、俺はもっと強くなる」

絆レベル

1

「・・・ああ、俺に話しかけてたのか。ふっ・・・俺よりも他のサーヴァントと話してた方が有意義だと思おうが？」

2

「俺の過去？・・・マスター、人間1度や2度失敗した事があるだろう

が、その失敗が致命的なミスだった事もあるんだぜ?・・・むやみに詮索はしないことを勧めるよ」

3 「へえ、随分と調子が良さそうだな。まあ、これだけの英霊がいれば順調に物事も運ぶか。ま、せいぜい頑張れよ。」

4 「あ?ギルガメツシユやアルトリアになぜそんなに冷たいのか・・・だって?・・・まあ、そうだな強いて言うならあいつらによつて俺と俺の家族の世界が壊されたから・・・だな」

5 「こんな状況下でよくぞまあここまで戦ってきたもんだよマスター。仮初の契約だが最後まで見届けてやる、明日をつかむぜ相棒」  
マスター

#### 会話

1 「んあ・・・寝てたか・・・仕事か?マスター」

2 「エミヤとの関係?・・・んー、それに関しちや薄々気がついてるだろ?あいつは俺とは違う道を進んだ俺だ。朔月士郎 衛宮士郎だからお互い気に食わないし、お互い認められない。ま、ガキの喧嘩とでも思ってくれよ」

3 「うげ・・・よりよつて今日のメンツほんとにこれなのかよ・・・。マスターってもしかして俺のこと嫌いか?・・・あ、仲良くしろと?んー・・・まあ、そのうちな・・・そのうち」(アルトリア剣、クーフーリン、ギルガメツシユ、メデアア、メドゥーサ、ハサン、ヘラクレス所持時)

4 「・・・ああ、彼女達か、うん、知ってるよ。彼女たちは俺の妹の大切な恩人で友達で希望だよ・・・おい、その人の事をまるでロリコンみたいな目で見るのやめろやこら・・・」(イリヤ、クロエ所持時)

5 「確かに俺は元々はエミヤシロウであり君の核となったサーヴァント

と大元は同じだけどそれで俺の事をお兄ちゃんって呼ぶのはどうかと思うが・・・え？あっちの弓兵より見た目も話し方も近いから？  
h……なんでさ」（クロエ絆レベル5）

好きなこと

「妹の笑顔を見る事かな。その為に戦ってきたんだ」

嫌いな事

「正義を掲げる奴、別に世界を救うだとかほざくのは構いやしないがその為に俺の家族を巻き込むなら誰であろうと斬り捨てる。マスターお前でもだ」

聖杯について

「万物の願望器・・・そんなものに願って何になる。そのせいで妹は・・・いや、何でもない」